

# 算命学中庸

## 【初年】 48 回目

48 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【地時空間】

・【初年】 48 回目 【地時空間】 01

### □ 地時空間 (ちじくうかん)

知事空間は「にじゅうはちげんひょう二十八元表」の成り立ちと関係します。

🔍 表・図はすべて 宿命 (1) なになに… と記載しました。

〔たとえば〕 02 頁「二十八元表」は⇒ 宿命 (1) 二十八元表

04 頁【十二支と季節の図】は⇒ 宿命 (2) 十二支と季節の図

08 頁「方三位」は⇒ 宿命 (3) 方三位の図

## 宿命（1）二十八元表

## 二十八元表

支	初元	中元	本元
子			癸 節明まで
丑	癸 9日	辛 3日	己 節明まで
寅	戊 7日	丙 7日	甲 節明まで
卯			乙 節明まで
辰	乙 9日	癸 3日	戊 節明まで
巳	戊 5日	庚 9日	丙 節明まで
午		己 19日	丁 節明まで
未	丁 9日	乙 3日	己 節明まで
申	戊 10日	壬 3日	庚 節明まで
酉			辛 節明まで
戌	辛 9日	丁 3日	戊 節明まで
亥	甲 12日		壬 節明まで

人体図の星を出すときには「二十八元表」を見て……

節入り日 の何日目の生れかによって、二十八元にある  
蔵干ぞうかんを決めたわけです。

この「二十八元表」が、どのようにして成り立ったのかという説明をします。

このことは直接、占いに用いるわけではないのですが、  
算命学の大事な考え方がいくつも含まれています。

『地時空間』地球上の時間と空間です。

「十干」と（十二支）で説明してゆきます。

「十干」は 10 個の「干」⇒『甲乙丙丁庚辛壬癸』です。

「十干」に五行（木火土金水）をあてはめることもできます。

（十二支）は 12 個の（支）です。十二支に“季節”をあては

めて、季節の『始 中心 終』を論ずることもできます。

⇒ 季節を寒暖でいえば〔冬は寒い〕〔夏は暑い〕です。

地球上の季節感を……夏とか冬とか呼称していますが、  
〔夏は暑い〕〔冬は寒い〕という時間の範囲の広がり  
過ぎないのです。

冬の季節の十二支は（亥月）（子月）（丑月）の 3 ヶ月

春の季節の十二支は（寅月）（卯月）（辰月）の 3 ヶ月

夏の季節の十二支は（巳月）（午月）（未月）の 3 ヶ月

秋の季節の十二支は（申月）（酉月）（戌月）の 3 ヶ月

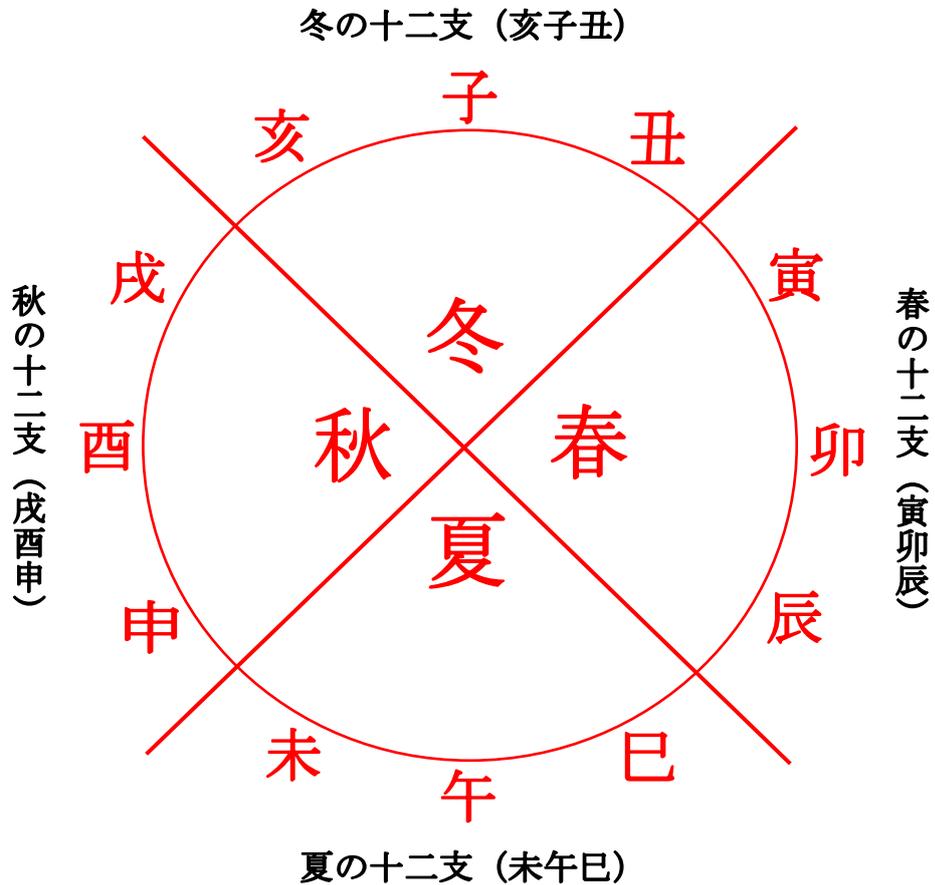
このように定めています。

1 年を巡る春夏秋冬の十二支を、3 ヶ月ずつに分割し  
て、1 年を 4 等分に区切っています。

4 ページに記載しました 宿命（2）十二支と季節の図 を見て  
いただくと理解できます。

宿命（2）十二支と季節の図

【 十二支と季節の図 】



春夏秋冬の季節を区切って、夏とか冬とか呼称していますが、それらは“時間”であると考えています。

夏 ⇒ 暑い  
 冬 ⇒ 寒い

} 時間

算命学は空間を「十干」<sup>じっかん</sup>であらわし、  
 時間を（十二支）<sup>じゅうにし</sup>であらわします。

〔夏〕 夏という時間の<sup>はんい</sup>範囲を意味する言葉と考えています。

〔冬〕 冬という時間の<sup>はんい</sup>範囲を意味する言葉と考えています。

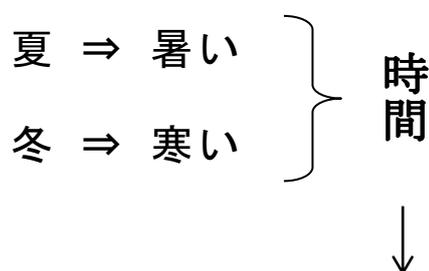
〔春夏秋冬〕の事象<sup>じしやう</sup>を感知<sup>かんち</sup>しますと……時間そのものは、暑くも寒くもならないはずです。

時間とは……なにかといえ、目に見えないもので、  
触<sup>さわ</sup>って感じることもできないし、時間そのものが暑くなったり、寒くなったりすることはないはずです。

古代の中国人はそのように考察したのです。

参考・感知〔気配や様子から感じ取って知ること〕

参考・考察〔物事を明らかにするためによく調べて考えること〕



時間そのものが暑くなったり

寒くなったりすることはないはずである

〔たとえば〕「昨日はすごく寒い日でしたね」とか、  
「今日は暖かいですね」というときに、昨日とか今日  
というのは、あくまで時間の範囲を意味しているわけ  
です。

時間を眼で見ることはできないし、振動<sup>しんどう</sup>が伝わること

もないですから、時間そのものから刺激を受けることはできません。時間そのものが、暑くなる・寒くなるということはないのですが、毎年、夏が来ると暑くなり、冬が来ると寒くなるのです。

そこで、昔の中国の人達はつぎのように考えたのです。

暑くなったり、寒くなったりするのは「空間」である。

自然界は「<sup>くうかん</sup>空間」と（<sup>じかん</sup>時間）で成り立っている……と  
考えているのです。

空間を「<sup>じっかん</sup>十干」であらわし、時間を（<sup>じゅうにし</sup>十二支）であらわします。  
時間そのものが〔暑くなる〕〔寒くなる〕とかすることは  
はないわけです。

暑くなったり、寒くなったり調節できるのは「空間」  
である。と考えたのです。

「空間」を<sup>とお</sup>透して、私たちの五感は〔暑さ〕〔寒さ〕を  
感じることができます。

つまり、夏という季節の時間が<sup>めぐ</sup>巡って来て暑くなるのは、  
その時間のなかに、暑さをもたらす「空間」が含まれている  
からである。という考え方をしたわけです。

「空間」と（時間）この考え方が基<sup>もと</sup>になって、十二支それぞれの時間のなかに……どのような空間が存在するのかを考察して、二十八元<sup>にじゅうはちげん</sup>の蔵干<sup>ぞうかん</sup>が決まりました。

算命学では、時間と空間といえは、時間を（十二支）であらわして、空間は「十干」であらわします。

夏暑くなるのは、夏という <sup>十二支</sup>時間 のなかに、  
暑さをもたらす <sup>十干</sup>空間 が含まれているからである。

それぞれの時間（十二支）のなかには、空間「十干」が含まれているということです。

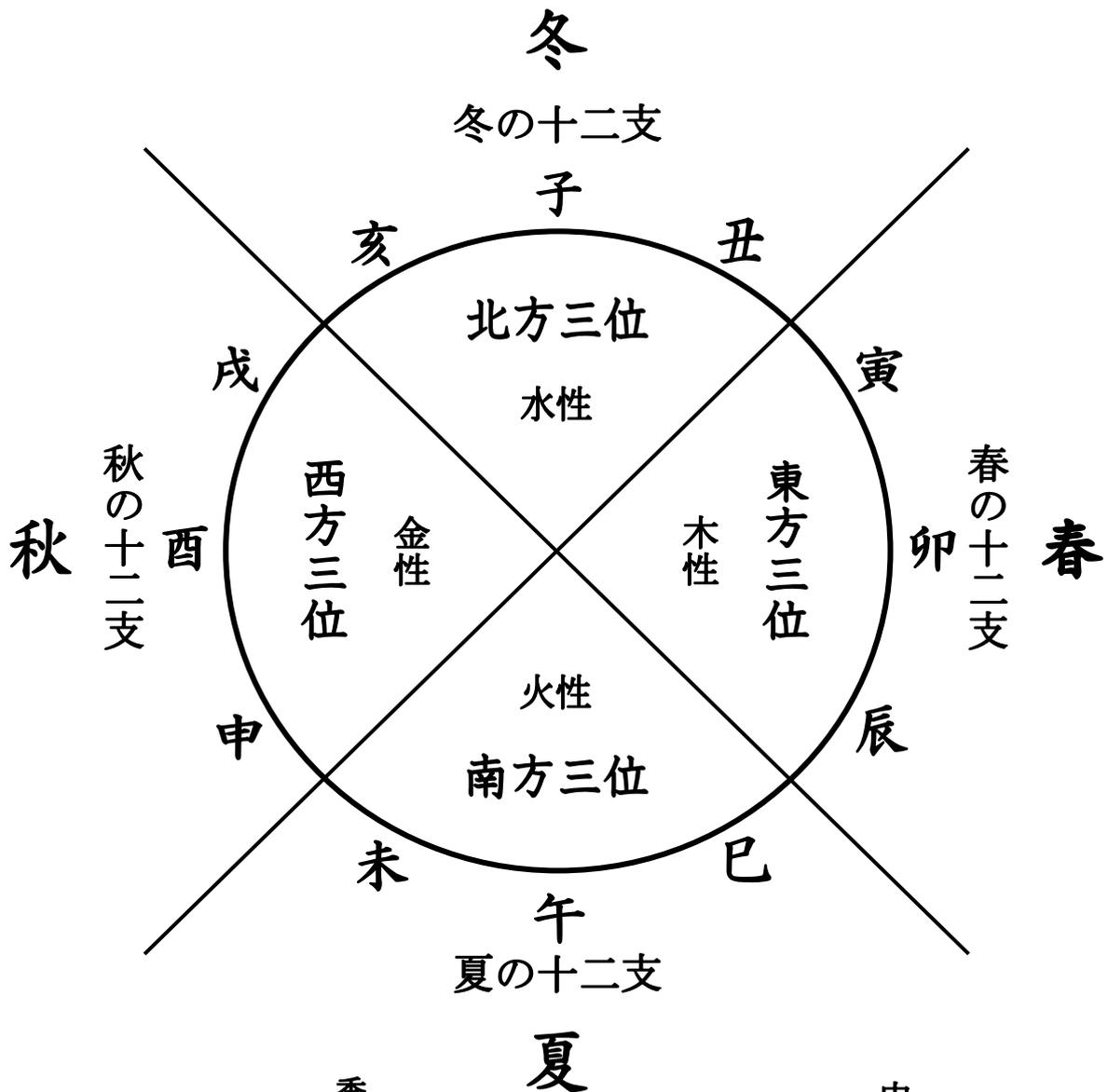
このような考え方が 二十八元表 作成の基<sup>もと</sup>になっています。

参考：考察〔物事の道理・本質を明らかにするため、よく調べて考えること〕

☞ <sup>い</sup>位〔<sup>い</sup>位置・<sup>ち</sup>方位〕〔事物のある場所〕

ほうさんい  
④ 「方三位」 十二支を四季節に区分します。

宿命 (3) 方三位の図 方三位は占うときにつかう技法です。



- |         |    |    |    |     |
|---------|----|----|----|-----|
|         | 季節 | 始  | 中  | 終   |
| 北は水性の旺地 | 冬  | ほう | ほう | さんい |
| 東は木性の旺地 | 春  | とう | ほう |     |
| 南は火性の旺地 | 夏  | なん | ほう |     |
| 西は金性の旺地 | 秋  | せい | ほう |     |
- 北は水性の旺地 **冬** 北方三位の十二支は (亥子丑) です。  
 東は木性の旺地 **春** 東方三位の十二支は (寅卯辰) です。  
 南は火性の旺地 **夏** 南方三位の十二支は (巳午未) です。  
 西は金性の旺地 **秋** 西方三位の十二支は (申酉戌) です。

👁️ <sup>ほうさんい</sup> 「方三位」 春の季節

<sup>い</sup> 位 [位置・方位] [事物のある場所]

季節には (<sup>みつ</sup> 三つの<sup>い</sup> 位) = (十二支) の<sup>そんざい</sup> 存在があります。  
春のおとずれになると、花は色に染まり、樹木は<sup>めぶ</sup> 芽吹いて若  
草色の葉をしげらせます。

春の季節に自然界が<sup>みどり</sup> 緑でおおわれるのは、「木性の空間」が  
<sup>おとず</sup> 訪れて来たからだ。と古代の中国人は考えたのです。

春の季節の十二支は (<sup>とら</sup> 寅) (<sup>う</sup> 卯) (<sup>たつ</sup> 辰) です。

二十八元表の (<sup>とら</sup> 寅) (<sup>う</sup> 卯) (<sup>たつ</sup> 辰) をみると、<sup>もくせい</sup> 木性を<sup>ぞうかん</sup> 蔵干して  
います。  
**3つの位**

**空間**

春 { <sup>ほんげん</sup> 寅の本元に<sup>ごぎょうもくせい</sup> 五行木性の<sup>じっかん</sup> 十干 [<sup>こうぼく</sup> 甲木] があります。  
<sup>おつぼく</sup> 卯の本元に五行木性の十干 [乙木] があります。  
<sup>しょげん</sup> 辰の初元に五行木性の十干 [乙木] があります。

春の十二支 (寅 卯 辰) のいずれにも [甲木] [乙木]  
という<sup>もくせい</sup> 木性の空間が<sup>そんざい</sup> 存在しているから、樹木は<sup>めぶ</sup> 芽吹き  
の姿になる。古代中国の学者は考えたのです。

参考：存在 [性質や働きや価値をもってそこにあること]

## ☞ 「方三位」 夏の季節

夏は暑くなりますから、夏の十二支（時間）には、暑さをもたらす火性の存在があります。 参考：位〔事物のある場所〕〔方位〕

夏の季節・十二支は（巳）（午）（未）です。

二十八元表の（巳）（午）（未）をみると、火性を蔵干しています。

空間

夏 {

- 巳の本元に五行火性の十干〔丙火〕があります。
- 午の本元に五行火性の十干〔丁火〕があります。
- 未の初元に五行火性の十干〔丁火〕があります。

夏の十二支（巳 午 未）の三支には〔丙火〕〔丁火〕という暑さをもたらす火性の空間が存在している。それゆえ夏が来ると暑くなると考えたのです。

「十干」は「空間」です。

「丙火」は陽の火性です。 → 「丁火」は陰の火性です。

（十二支）は時間です。

参考：存在〔性質や働きや価値をもってそこにあること〕

## ☞ 「方三位」 秋の季節

秋になると樹木の成長は止まり、枝葉が落ちて、枯れたような姿になります。

そうなるのは、木性をやっつけてしまう（相剋する）、金性のチカラが強くなるためだと考えたのです。

秋の季節の十二支は（申）（酉）（戌）です。

二十八元表で（申）（酉）（戌）をみるとわかります。

3つの位

これら三支のなかには、木性を相剋する金性の十干が存在します。

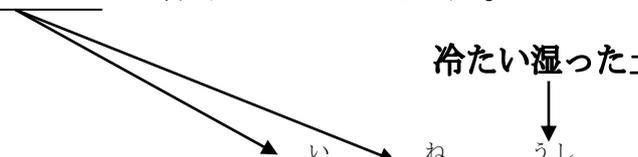
秋 {

さる	ほんげん	ごぎょうきんせい	空間	こうきん	があります。
とり				しんきん	があります。
いぬ	しょげん			しんきん	があります。

ここでの金性の意味合いは……金性はものにたとえて〔斧・刃物〕

## ☞ 「方三位」 冬の季節

冬は冷たい水の存在があります。


 冷たい湿った土  
 ↓  
 冬の季節の十二支は (亥) (子) (丑) です。

(亥子丑) 三支には、寒さをもたらす冬の水性が存在します

冬 {
 

- 亥の本元に五行水性の十干 [壬水] があります。
- 子の本元に五行水性の十干 [癸水] があります。
- 丑の初元に五行水性の十干 [癸水] があります。

春夏秋冬の三位には (木性) (火性) (金性) (水性) の『気』が存在しています。

春の季節の十二支 (寅卯辰) の三位には木性の「気」が存在します。

夏の季節の十二支 (巳午未) は火性の「気」が存在します。

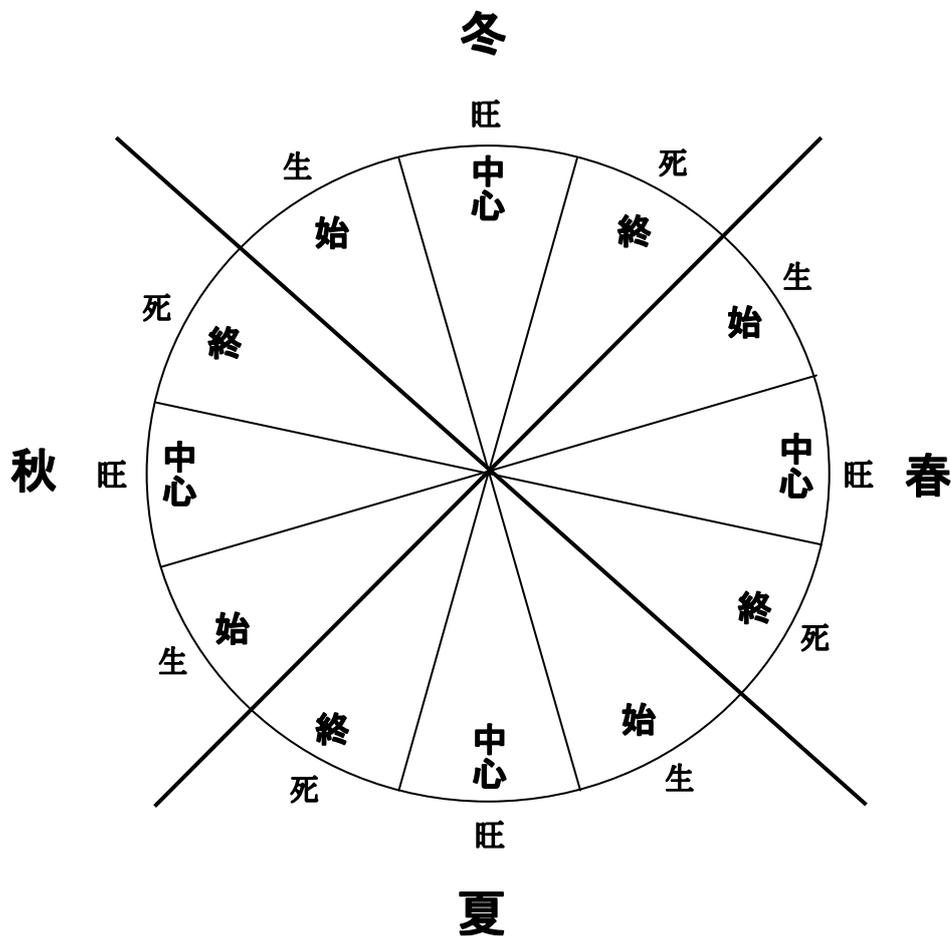
秋の季節の十二支 (申酉戌) は金性の「気」が存在します。

冬の季節の十二支 (亥子丑) は水性の「気」が存在します。

せいおうし せいおうし はじめ ちゅうしん おわり  
『生旺死』 『始 中心 終』 十二支盤に配置しました。

宿命（4）十二支盤の『生旺死』と『始 中心 終』

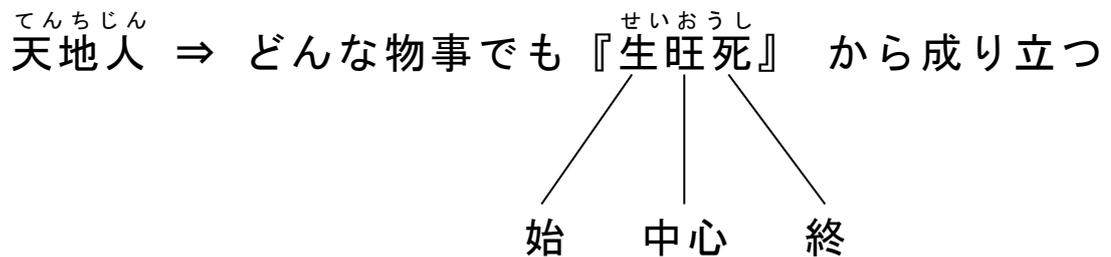
十二支盤 『生・旺・死』 始り・中心・終り



『生旺死』の考え方は、算命学のなかでも、大事な考  
え方のひとつです。『生旺死』は『始まり・中心・終わり』です。

てんちじん  
「天地人」という考え方が、昔の中国にありました。

宿命（5）天地人と生旺死



「どのような物事でも『<sup>せいおうし</sup>生旺死』で成り立つ」とする考え方です。

『始め・中心・終わり』という<sup>そんざい</sup>存在で成り立つということです。『万物は始めと中心と終わりがある』そのように説明しました。

算命学では『<sup>せい おう し</sup>生 旺 死』とといいます。

人体図三分法においても、

人間の一生というのは、「<sup>しよねんき</sup>初年期」「<sup>ちゅうねんき</sup>中年期」「<sup>ばんねんき</sup>晩年期」  
これら3つの時代から成り立っています。

そのようにお伝えしました。

参考：存在〔性質や働きや価値をもってそこにあること〕

〔客観的な事実してそこにある（とされる）こと〕

自然界を<sup>かんさつ</sup>観察しても、太陽は（朝）東から<sup>のぼ</sup>昇って来て、お昼になれば天の中心に来て、夕方になれば西へ沈みます。自然界の事象はすべて「始め・中心・終わり」という 3 つの区分で成り立ちます。

地球上に存在するあらゆる事物は「生<sup>せい</sup> 旺<sup>おう</sup> 死<sup>し</sup>」という一連の流れを経て<sup>しゅうえん</sup>終焉を迎えます。

このような考え方が当時の中国にあったわけです。

人間の<sup>いっしょう</sup>一生に「**始** **中心** **終**」の考え方を当てはめると、人間の一生も「生旺死」と<sup>れんかん</sup>連関しているわけです。 参考：連関 [互いにつながりがあること]

方三位『**始 中心 終**』と <sup>さんごうかいきよく</sup>三合会局『生 旺 死』は、お互いにかかわり合っています。

〔たとえば〕「Aさんは中年期に重役に出世しました」  
Aさんが『なぜ出世できたのかといえば……』中年期に頑張って働いたから出世できました。それも理由のひとつかも知れませんが……必ず、Aさんの初年期での<sup>きばん</sup>過ごし方にも、出世の基盤があるはずです。

子供の頃に「頑張って勉強した」それが大人になって出世につながりましたとか……子供時代に<sup>からだ</sup>体を鍛えたおかげで、他社との厳しい競争に<sup>くっ</sup>屈することなく、働くことができました。

さまざまに出世につながる基盤が存在するはずです。

中年期に出世したのであれば、その<sup>いんし</sup>因子は必ず初年期にあったはずです。初年期に体験した事柄はその人物の晩年期にも影響を与えます。

「中年期に出世したお陰<sup>かげ</sup>で、よい晩年が送れました」という場合もあるでしょう。

逆に……中年期に出世をしたけど、働き過ぎた無理が<sup>たた</sup>崇って、晩年には身体を壊して寿命を縮めた。という人もいるかもしれません。

あるいは、中年期に出世し過ぎて、まわりの人から<sup>うら</sup>恨みを<sup>こうむ</sup>被ってしまい、不幸な晩年を送るようになった。そういう人生の人もいます。

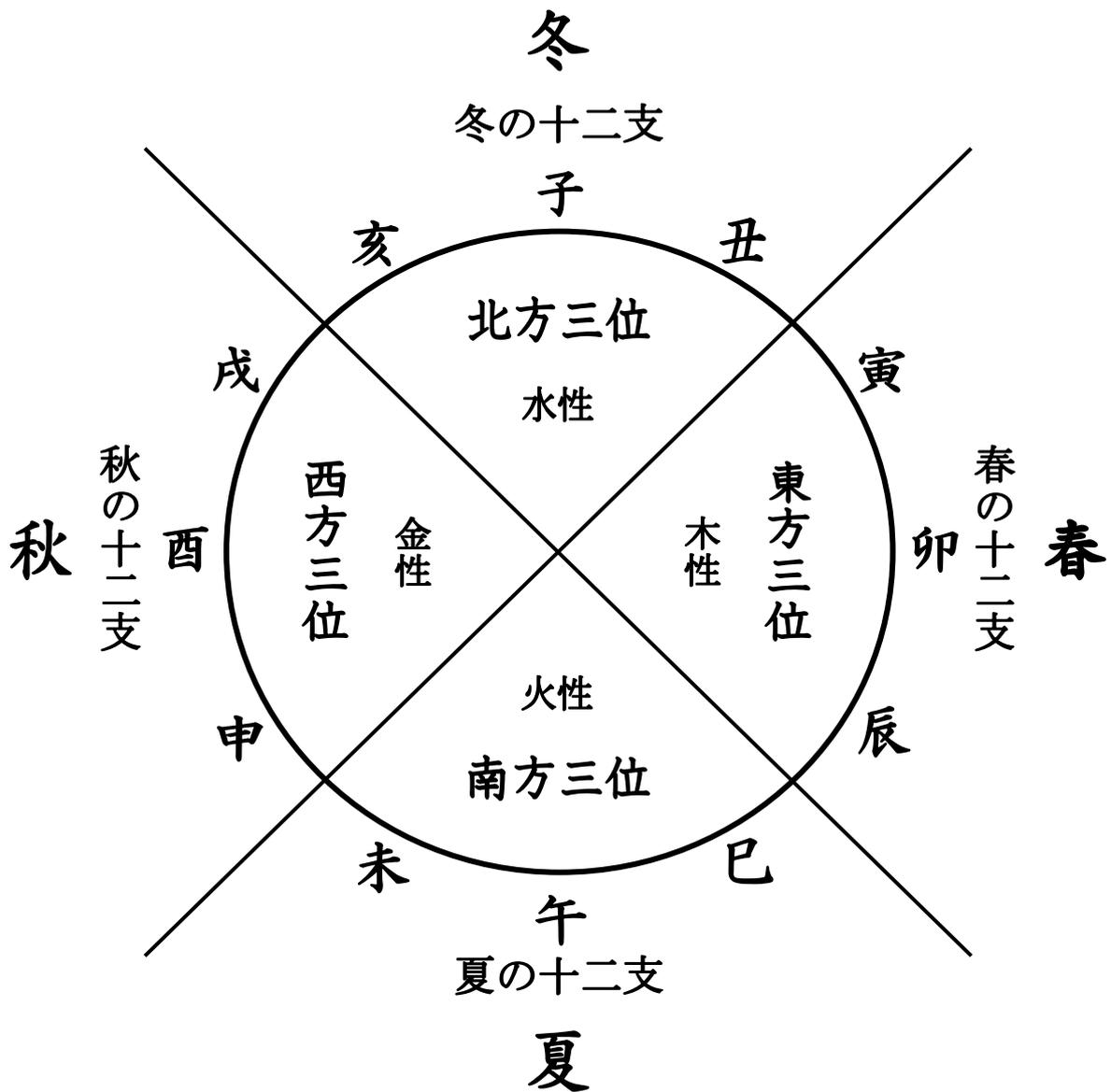
「晩年になって幸せな日々をおくっています」という人物は〔晩年期によい運勢がまわってきている〕からそれも理由のひとつになるといえますが、幸せな晩年を送れるのは、中年期の過ごし方がよかったからです。

ほうさんい   はじめ   ちゅうしん   おわり                   さんごうかいきよく   せい   おう   し  
方三位『始 中心 終』と 三合会局『生 旺 死』  
これら3つの時代は連関しています。

参考：連関〔互いにつながりがあること〕

🔍 18 ページから十二支盤に当てはめて考えます。

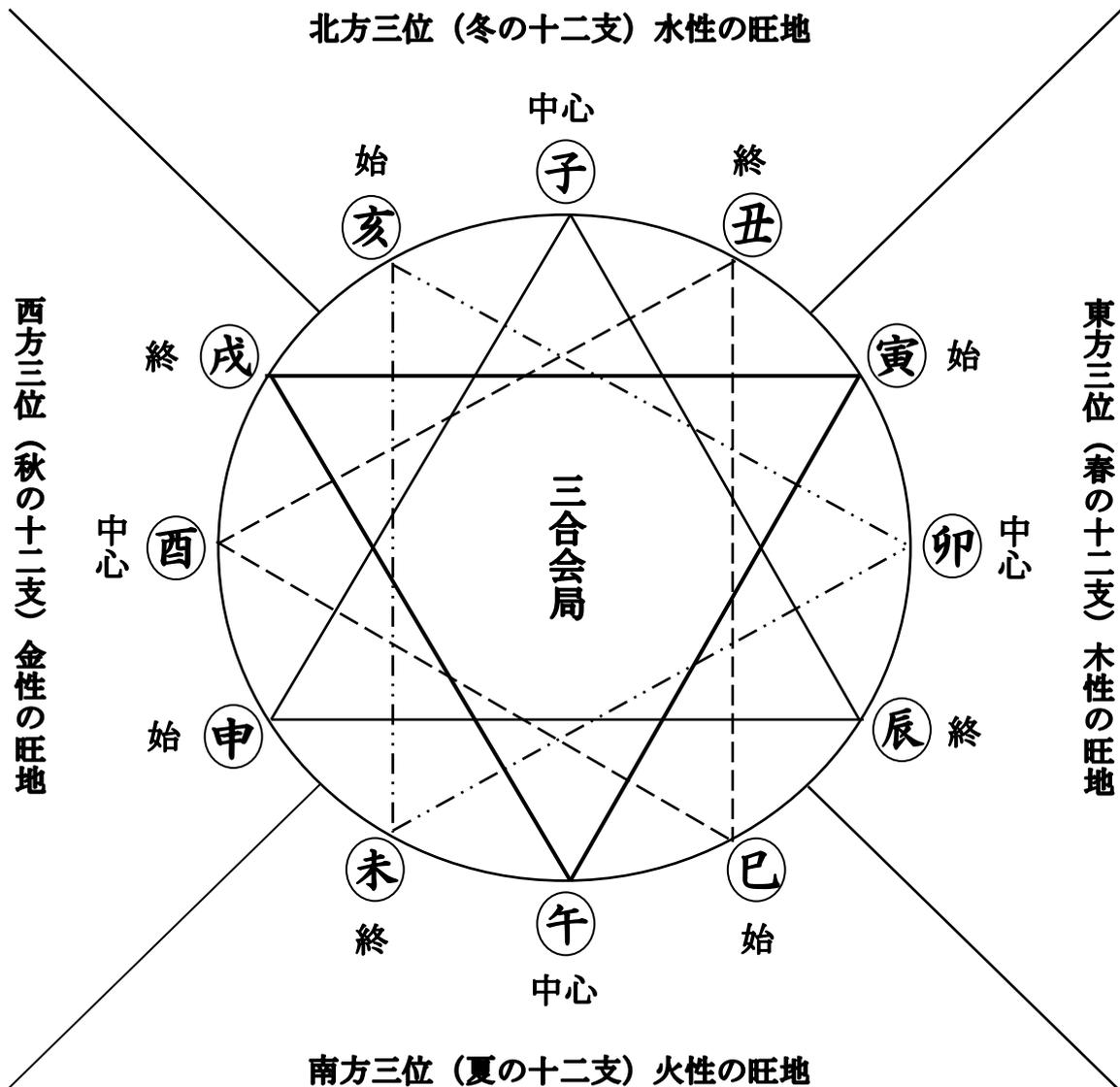
宿命（6）方三位の図 08 ページとおなじ図です。



	季節	始 中 終
北は水性の旺地	冬	北方三位の十二支は (亥子丑) です。
東は木性の旺地	春	東方三位の十二支は (寅卯辰) です。
南は火性の旺地	夏	南方三位の十二支は (巳午未) です。
西は金性の旺地	秋	西方三位の十二支は (申酉戌) です。

宿命（7）方三位と三合会局を組み合わせた図

## 「方三位」と「三合会局」



円周の外側は「方三位」です。

円周の内側 ⇒ 正三角形4つは「三合会局」です。

☞ 「<sup>ほうさんい</sup>方三位」と「<sup>さんごうかいきょく</sup>三合会局」

図の説明

参考：位〔場所・位置・方位〕

「方三位」は各季節の「始・中心・終」を意味します。

<sup>ほっぽうさんい</sup>北方三位の十二支は（<sup>いねうし</sup>亥子丑）です。

北方三位の中心は水性の（<sup>ねすい</sup>子水）です。

北に位置していますから、季節は冬です。

<sup>なんぽうさんい</sup>南方三位の十二支は（<sup>みうまひつじ</sup>巳午未）です。

南方三位の中心は火性の（<sup>うまび</sup>午火）です。

南に位置していますから、季節は夏です。

「三合会局法」の正三角形は<sup>さんし</sup>三支の結びつきです。

（<sup>さるねたつ</sup>申子辰）は水性（<sup>ねすい</sup>子水）を中心にした結びつきですから

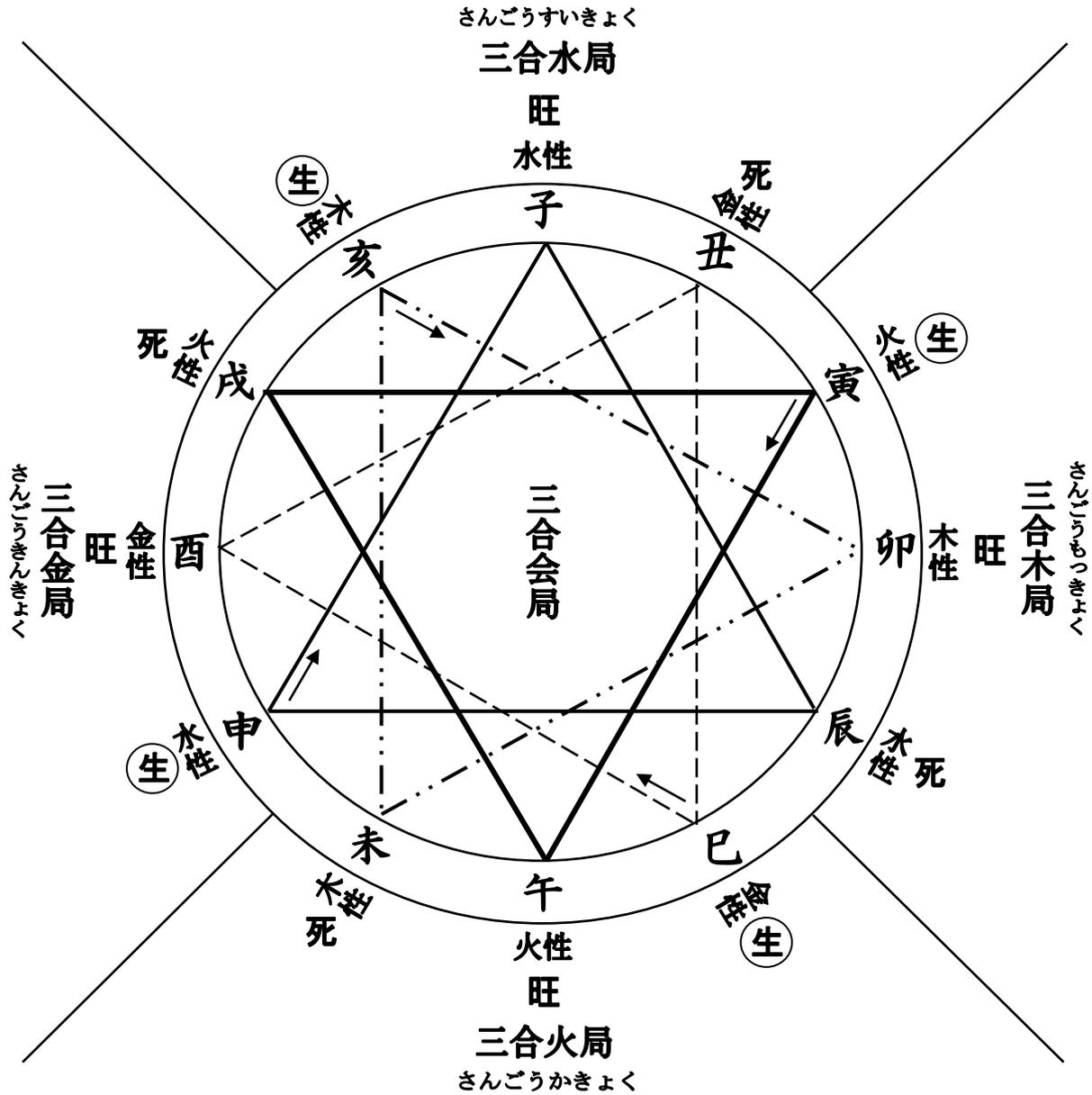
（<sup>さるね</sup>申子の半会）も（<sup>はんかい</sup>申辰の半会）も（<sup>さるたつ</sup>申辰の半会）も（<sup>ねたつ</sup>子辰の半会）も水性に変化します。

（<sup>とらうまいぬ</sup>寅午戌）は火性（<sup>うまび</sup>午火）を中心にした結びつきですから

（<sup>とらうま</sup>寅午の半会）も（<sup>はんかい</sup>寅辰の半会）も（<sup>とらいぬ</sup>寅戌の半会）も（<sup>うまいぬ</sup>午戌の半会）も火性に変化します。

➡ 「三合会局」の『生 旺 死』

宿命（8）三合会局の図



さんごうもつきょく  
木性の三合会局を「三合木局」という。

生 旺 死

- |                |                |
|----------------|----------------|
| ① 木性の三合会局（亥卯未） | ② 火性の三合会局（寅午戌） |
| ③ 金性の三合会局（巳酉丑） | ④ 水性の三合会局（申子辰） |

三合会局は 4つ あります。

「三合会局 生・旺・死」と「方三位 始・中心・終」

宿命（9）三合会局と方三位の連関図

→を「生 旺 死」の「生」のところに付けました。（わかりやすいように）



参考：連関 [互いにつながりがあること]

☞ <sup>さんごうかいきょく</sup> 三合会局も <sup>だいさんごうかいきょく</sup> 大三合会局も <sup>うちゅうばん</sup> 宇宙盤の内で最大の三角形です。

宇宙盤 ⇒ 「干支番号 1 番「甲子」から干支番号 60 番「癸亥」まで  
60 個の干支が十二支盤の円周に沿って書かれている円盤図

(小泉純一郎・前総理) (スティーヴン・ホーキング博士・宇宙論)

二人とも生年月日は (1942-1-8) です。

☞ <sup>だいさんごうかいきょく</sup> 大三合会局は <sup>てんかん</sup> 天干の「<sup>さんかん</sup>三干」がおなじです。

✽ 小泉純一郎 1942-1-8 宿命 (10) 小泉純一郎

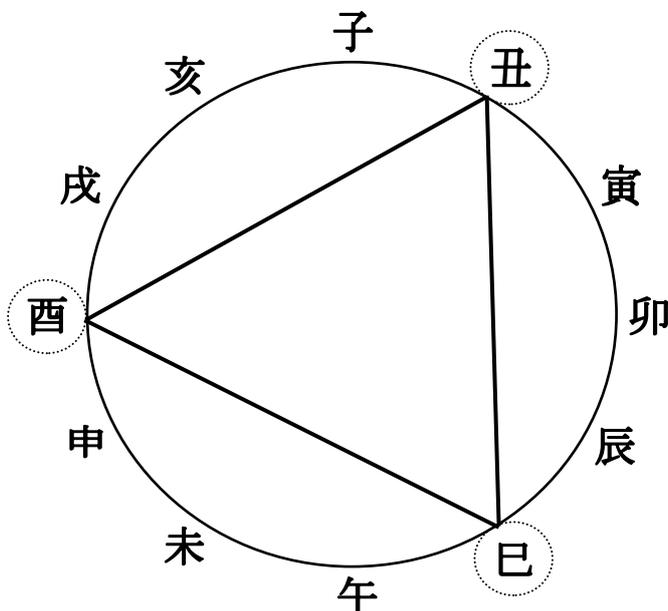
辛 辛 辛 — 天干の三干はおなじ「辛金 しんきん」

子 酉 丑 巳 日干支「辛酉 しんきんのとりきん」

丑 癸 戊 月干支「辛丑 しんきんのうしど」

辛 庚 年干支「辛巳 しんきんのみび」

辛 己 丙



☞ 「三合会局」十二支盤の<sup>うち</sup>内で、最大の正三角形を形成する結びつきです。

＊ 小泉さんの宿命は（巳酉丑）の<sup>み とりうし</sup>大三合会局<sup>だいさんごうかいきょく</sup>です。

とても大きな器の持ち主です。

このような宿命は地方都市の知事は不向きです。

一国の総理大臣は適任といえます。

＊ スティーヴン・ホーキング博士も（巳酉丑）の<sup>み とりうし</sup>大三合会局<sup>だいさんごうかいきょく</sup>

です。ホーキング博士は物理学者・宇宙論学者です。

宇宙盤で最大の三角形をつくる宿命は、宇宙の研究をするのに適しています。

・ 小さな三角形の宿命もあります。

・ <sup>するど</sup>鋭い<sup>やり</sup>槍の<sup>ほさき</sup>穂先のような宿命もあります。

・ 一本の線になる宿命もあります。

三角形の姿に（よい）（わるい）はないのです。

ご自分の宿命に見合った生き方をすれば宿命どおりです。

宇宙盤に…宿命の三千支を線で結ぶと、その人の行動範囲を知ることができます。

✽ 小泉 純一郎 1942(s17)-1-8

宿命 ( 1 1 ) 小泉純一郎

	辛	辛	辛		貫索星	天極星	
子	酉	丑	巳		貫索星	鳳閣星	玉堂星
丑		癸	戊		天祿星	貫索星	天印星
		辛	庚				
	辛	己	丙				

地支は (巳酉丑) 金性の三合会局

大運はホーキング博士とおなじです。宿命 ( 1 2 ) ホーキング

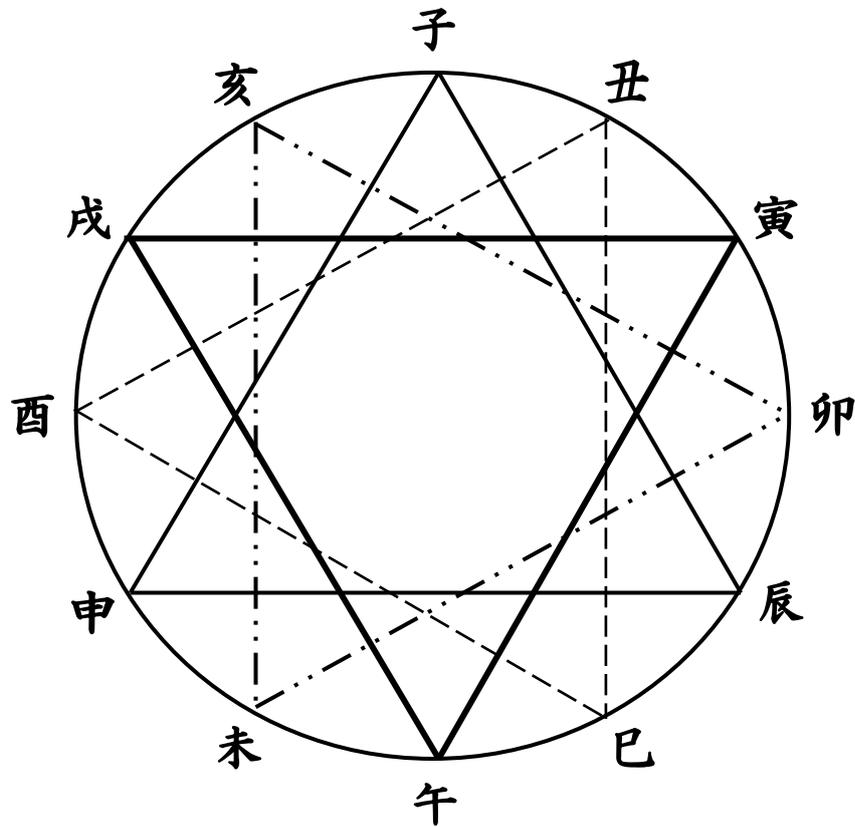
✽ スティーヴン・ホーキング 1942-1-8 [2018-3-14] 76 歳

大運

	辛	辛	辛		貫索星	天極星	1 庚子
子	酉	丑	巳		貫索星	鳳閣星	11 己亥
丑		癸	戊		天祿星	貫索星	21 戊戌
		辛	庚				31 丁酉
	辛	己	丙				41 丙申
							51 乙未
							61 甲午
							71 癸巳

地支は (巳酉丑) 金性の三合会局

宿命 (13) 三合会局の図式



余分な線を取り除いた「三合会局」だけの図式です。

生 旺 死

- ① 木性の三合会局 十二支 (亥 卯 未) の結びつき
- ② 火性の三合会局 十二支 (寅 午 戌) の結びつき
- ③ 金性の三合会局 十二支 (巳 酉 丑) の結びつき
- ④ 水性の三合会局 十二支 (申 子 辰) の結びつき

① さんごうもつきょく 三合木局 (いうひつじ 亥卯未)

② さんごうかきょく 三合火局 (とらうまいぬ 寅午戌)

③ さんごうきんきょく 三合金局 (みとりうし 巳酉丑)

④ さんごうすいきょく 三合水局 (さるねたつ 申子辰)

☞ 『始・中心・終り』そして『生・旺・死』の参考資料

【初年】 40 回目【十二大従星力学①】 ⇒ 『始め・中心・終わり』 09 ページ

天報星（胎児） 22 ページ

【初年】 41 回目【十二大従星力学②】 ⇒ 天印星（赤子） 01 ページ

天貴星（児童） 31 ページ

【初年】 43 回目【十二大従星力学③】 ⇒ 天恍星（少年） 01 ページ

天南星（青年） 27 ページ

【初年】 44 回目【十二大従星力学④】 ⇒ 天禄星（壮年） 01 ページ

天将星（家長） 22 ページ

天堂星（老人） 37 ページ

【初年】 45 回目【十二大従星力学⑤】 ⇒ 天胡星（病人） 01 ページ

天極星（死人） 01 ページ

【初年】 46 回目【十二大従星力学⑥】 ⇒ 天庫星（入墓） 19 ページ

天馳星（彼の世） 43 ページ

人間の一生には大きな山が三箇所あります。

『生 旺 死』三箇所の頂点が『旺』です。

人間は母親の胎内で育まれているときに、産まれてくる子供の「気」は発生しています。

人間として……始めの出発集団は『生』です。

人間として、人生の出発集団『生』に相当するのは、十二大従星の（胎児・赤ん坊・児童・少年）と考えています。

その頂点は「天地人」が入魂する【天貴星（児童）】です。

🔍 参考資料【初年】 48 回目【十二大従星力学②】

### ⇒ 天貴星

地球上に生命をうけて、3年くらいで精神は完成します。

天気 — 1年	}	生まれて3年で「天地人」の『氣』がそなわります。
地気 — 1年		
人氣 — 1年		

『旺』としての活動集団は〔青年・壮年・家長・老人・病人〕までです。

その集団の中で、もっとも行動的・活動的にチカラを発揮できる頂点は【天将星（家長）】です。

『死』は人生の終焉を迎える〔死人・入墓・彼の世〕の星です。

その頂点は【天庫星（入墓）】です。

① <sup>さんごうもつきよく</sup>三合木局の『<sup>せい</sup>生 <sup>わう</sup>旺 <sup>し</sup>死』は（<sup>い</sup>亥 <sup>う</sup>卯 <sup>ひつじ</sup>未）です。

<sup>もくせい</sup>木性の<sup>さんごうかいきよく</sup>三合会局は（<sup>い</sup>亥 <sup>う</sup>卯 <sup>ひつじ</sup>未）です。

『<sup>せい</sup>生 <sup>わう</sup>旺 <sup>し</sup>死』のなかで、中心の『<sup>わう</sup>旺』は（<sup>う</sup>卯）です。

木性の（<sup>う</sup>卯）が春の中心ですから、（<sup>う</sup>卯）は三合木局の『<sup>わう</sup>旺』になります。

（<sup>う</sup>卯）は木性のチカラが最も強くなる場所です。

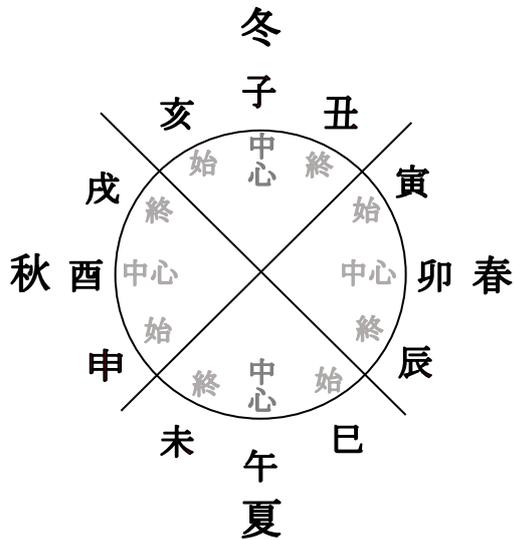
十二支盤のなかで、（<sup>う</sup>卯）を基点にして正三角形をつくと（<sup>せい</sup>生 <sup>わう</sup>旺 <sup>し</sup>死）になります。

<sup>もくせい</sup>木性の三合会局（<sup>い</sup>亥 <sup>う</sup>卯 <sup>ひつじ</sup>未）は（<sup>う</sup>卯木）が『<sup>わう</sup>旺』です。

木性の『<sup>わう</sup>旺』が活動の頂点ですから『<sup>さんごうもつきよく</sup>三合木局』と<sup>こしょう</sup>呼称します。

参考：旺〔中心で勢いがさかんな様子〕

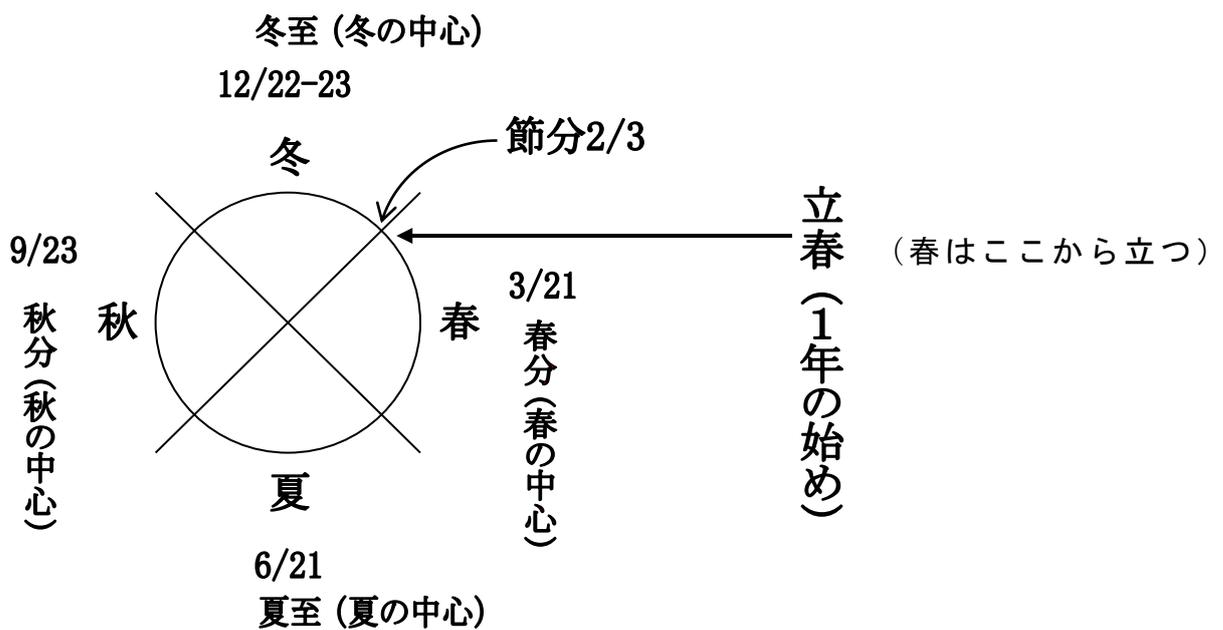
🔍 参考⇒【初年】 2回目【三つの礎】 その(1) 十二支 17ページ



宿命(14) 十二支盤 として記載

🔍 参考⇒【初年】 2回目【三つの礎】 その(1) 十二支 30ページ

宿命(10) 立春 として記載



## ② 三合火局の『生 旺 死』は（寅午戌）です。

火性の三合会局は（寅 午 戌）です。

『生 旺 死』のなかで、中心の『旺』は（午）です。

（午）は夏の中心ですから、三合火局の『旺』になります。

生 旺 死  
（寅 午 戌）の三支は『旺』を頂点として、正三角形で結ばれます。

三合木局 ⇒ （寅は生）（午は旺）（戌は死）

三合火局で（寅）は火性の『生旺死』の『生』に位置しますから、『始め 中心 終わり』のうちでは『始め』になります。

暦のうえで（寅）は“春の始め”です。

（寅）は“1年の始まり”でもあるわけです。

自然界は（寅）の月から……暖かくなり始めます。

寅の月は火性の気が生れるところですから……『生』になるわけです。

寅月から暖かくなり始めた火性は、春から夏へ向かうと、どんどん温かさを増していきます。そして……

暦こよみのうえでは（午うま=夏至げし）で頂点を迎えますけど……  
火性の中心を過ぎたからといっても、火性のチカラが  
急にきゆう（あっさり）無なくなるわけではなくて、まだしばらく  
暑さは残りますが、火性のチカラはしだいしだいに  
衰おとろえて、（戌いぬ）で終焉しゅうえんを迎えます。

太陽暦たいようれき（地球が太陽のまわりを一回転する時間を、1年とする暦で、  
日常つかっているカレンダーです）

立秋りっしゅう（秋の始め、太陽暦の8月7日頃）昔の中国および日本では、  
この日から秋になるとしたのです）「秋が立つ」という意。

残暑ざんしょ（立秋の秋にはいっても、なお残る夏の暑さ）

☞ 暦こよみのうえで「夏至げし」は火性の頂点なのですが、ご承知の  
ように実際に暑い夏は8月です。冬の寒さの頂点も「冬至とうじ」  
の日ではなく……ずれています。この現象は陸地や海が温ま  
るまでに時間がかかるのです。いったん温まると簡単かんたんに冷ひえ  
ません。これは地表に放射される熱量だけで、地球の気温が  
決まるわけではないからです。

☞ 四季節の終わりに位置する4つの土性どせい（丑うし・辰たつ・未ひつじ・戌いぬ）  
は、季節が変わるときの調整役を司つかさどります。

「方三位」秋の十二支は（申<sup>さる</sup> 酉<sup>とり</sup> 戌<sup>いぬ</sup>）です。

（戌<sup>いぬど</sup>土）で秋の季節は終わり、冬へ向かいます。

「方三位」冬の十二支（亥<sup>い</sup> 子<sup>ね</sup> 丑<sup>うし</sup>）に移り変わると、  
北の冷たい子<sup>ねすい</sup>水の季節です。

（丑）で冬の季節は終わり、季節は春へ向かいます。

「方三位」春の十二支は（寅<sup>とら</sup> 卯<sup>う</sup> 辰<sup>たつ</sup>）です。

春の季節は（寅）から始まり、だんだんと暖かくなり  
（卯）で春の頂点を迎えると、（辰）で終わります。

日本は梅雨を経て……夏をむかえます。

「方三位」夏の十二支は（巳<sup>み</sup> 午<sup>うま</sup> 未<sup>ひつじ</sup>）です。

春から（巳<sup>み</sup>火）へ移ろい、火性の気が強まって（午<sup>うま</sup>火）  
で頂点を迎えます。（午）を過ぎると徐々に衰えながら  
秋の終わり（戌<sup>いぬ</sup>）で火性のチカラは消滅します。

🔍 「方三位」と「三合会局」は <sup>れんかん</sup> 連関しています。

**宿命（14）三合会局と方三位の連関図** をみると、ご理解できる  
でしょう。 参考：連関 [互いに切り離すことのできない関係]

宿命（14）三合会局と方三位の連関図

22 頁の図とおなじです。



「北方三位（亥子丑）」と「三合水局（申子辰）」は水性が存在します。

「東方三位（寅卯辰）」と「三合木局（亥卯未）」は木性が存在します。

「南方三位（巳午未）」と「三合火局（寅午戌）」は火性が存在します。

「西方三位（申酉戌）」と「三合金局（巳酉丑）」は金性が存在します。

宿命（15）二十八元表 02 ページの表とおなじです。

## 二十八元表

支	初元	中元	本元
子			癸 節明まで
丑	癸 9日	辛 3日	己 節明まで
寅	戊 7日	丙 7日	甲 節明まで
卯			乙 節明まで
辰	乙 9日	癸 3日	戊 節明まで
巳	戊 5日	庚 9日	丙 節明まで
午		己 19日	丁 節明まで
未	丁 9日	乙 3日	己 節明まで
申	戊 10日	壬 3日	庚 節明まで
酉			辛 節明まで
戌	辛 9日	丁 3日	戊 節明まで
亥	甲 12日		壬 節明まで

「三合会局」の（十二支）を二十八元表でみると……

「三合水局（申子辰）」をみると、申の中元には〔壬水〕。

子の本元には〔癸水〕。辰の中元には〔癸水〕。

「三合水局」の三支の蔵干すべてに水性が存在します。

「三合木局（亥卯未）」をみると、亥の初元には〔甲木〕。

卯の本元には〔乙木〕。未の中元には〔乙木〕。

「三合木局」の三支の蔵干すべてに木性が存在します。

「三合火局（寅午戌）」をみると、寅の中元には〔丙火〕。  
午の本元には〔丁火〕。 戌の中元には〔丁火〕。

「三合火局」の三支の蔵干すべてに火性が存在します。

「三合金局（巳酉丑）」をみると、巳の中元には〔庚金〕。  
酉の本元には〔辛金〕。 丑の中元には〔辛金〕。

「三合金局」の三支の蔵干すべてに金性が存在します。

二十八元表の十二支に〔初元〕〔中元〕〔本元〕があります。

〔初元〕〔中元〕〔本元〕のなかに存在する「十干」を〔蔵干〕  
といいます。

蔵干 ⇒ 二十八元の蔵のなかにある「干」という意味です。

参考：存在〔それぞれの性質や価値をもってあること〕

ここまでご理解いただけましたでしょうか……。

③ 三合金局の『生 旺 死』は（巳酉丑）です。

金性の三合会局で『旺』と呼べる中心の十二支は（酉）  
です。（酉）が金性の中心になるところです。

（酉）を基点にして、正三角形を描くと（巳 酉 丑）  
の組み合わせができます。

三合金局 ⇒ （巳は生）（酉は旺）（丑は死）

金性は（巳）から強くなり始めて、（酉）のところで  
頂点になり、（丑）のところまでチカラが続きます。

二十八元表で「三合金局の十二支（巳酉丑）をみると……、

（巳）の中元には〔庚金〕。 （酉）の本元には〔辛金〕。

（丑）の中元には〔辛金〕があります。

「三合金局」の三支の蔵干すべてに金性が存在します。

これら3つ蔵干には〔金性〕が含まれています。

それゆえ連関があるのです。

参考：連関〔互いにつながりがあること〕

## ④ 三合水局の『生 旺 死』は（申子辰）です。

水性の三合会局で『旺』と呼べる中心の十二支は（子）  
です。（子）が水性の中心になるところです。

水性の『旺』と呼べる十二支は（子）です。

（子）が冬を中心です。

🔍 **宿命（9）三合会局と方三位の連関図** を見てください。

（申）を基点に正三角形を作ると三合会局（申子辰）  
の組み合わせができます。

生 旺 死

（申 子 辰）は水性の三合会局になります。

三合水局 ⇒ （申は生）（子は旺）（辰は死）

（申子辰）は水性の三合会局ですから、二十八元表を  
みるとわかりますが、〔壬水〕〔癸水〕が蔵干に入っ  
ています。

「三合水局（申子辰）」をみると、申の中元には〔壬水〕。

子の本元には〔癸水〕。辰の中元に〔癸水〕があります。

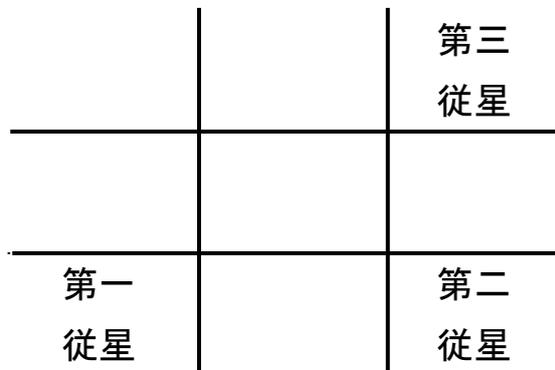
「三合水局」の蔵干すべてに水性が存在します

👁️ 『十二大従星表』をつかいます。

宿命（16）十二大従星表

『十二大従星表』

- ① 日干から年支を見て ..... 第三従星
- ② 日干から月支を見て ..... 第二従星
- ③ 日干から日支を見て ..... 第一従星



十二大従星表

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	日干 星
巳	午	寅	卯	亥	子	亥	子	申	酉	天報星
辰	未	丑	辰	戌	丑	戌	丑	未	戌	天印星
卯	申	子	巳	酉	寅	酉	寅	午	亥	天貴星
寅	酉	亥	午	申	卯	申	卯	巳	子	天恍星
丑	戌	戌	未	未	辰	未	辰	辰	丑	天南星
子	亥	酉	申	午	巳	午	巳	卯	寅	天禄星
亥	子	申	酉	巳	午	巳	午	寅	卯	天将星
戌	丑	未	戌	辰	未	辰	未	丑	辰	天堂星
酉	寅	午	亥	卯	申	卯	申	子	巳	天胡星
申	卯	巳	子	寅	酉	寅	酉	亥	午	天極星
未	辰	辰	丑	丑	戌	丑	戌	戌	未	天庫星
午	巳	卯	寅	子	亥	子	亥	酉	申	天馳星

⇒ 十二大従星も三合会局法の組み合わせに関係しています。

参考：関係 [何らかの役割を負って無視することができないつながり]

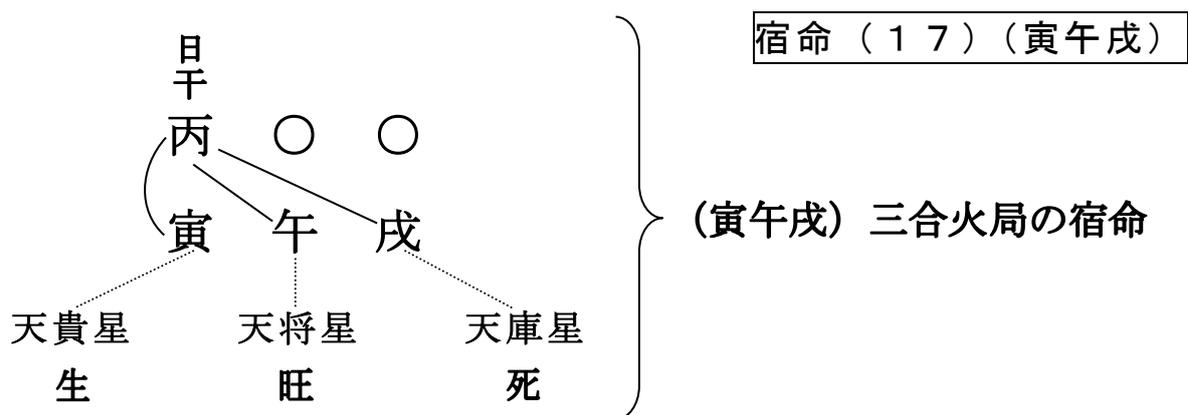
三合会局法『生旺死』の組み合わせを、十二大従星であらわすと『<sup>せい てん き せい</sup>生・天貴星』 『<sup>おう てん しょう せい</sup>旺・天将星』 『<sup>し てん くら せい</sup>死・天庫星』という組み合わせになります。【天庫星】の正式名称は(てんこせい)

**宿命 (16) 十二大従星表** をみると…十二大従星がわかります。

具体的に火性の三合会局 (<sup>とらうまいぬ</sup>寅午戌) でやってみます。

(こういう宿命の人はめったにいません)

日干「<sup>へい か</sup>丙火」の人物がいます。地支には <sup>生 旺 死</sup>(寅 午 戌) の<sup>さんし</sup>三支があるとします。「三合会局」火性の宿命です。



この人物の宿命から十二大従星をだすときは、日干「丙火」から(寅)をみます。

星になおすと『生・天貴星』になります。 ➡

丙火<sup>へいか</sup>から日支<sup>とら</sup>（寅）をみて…星になおすと『天貴星<sup>てんきせい</sup>』です。

丙火から月支<sup>うま</sup>（午）をみて…星になおすと『天将星<sup>てんしょうせい</sup>』です。

丙火から年支<sup>いぬ</sup>（戌）をみて…星になおすと『天庫星<sup>てんくらせい</sup>』です。

🔍 『十二大従星表』を見て確認してください。⇒ 39 ページ

日干「丙火」から（寅）をみると天貴星（児童の星）

日干「丙火」から（午）をみると天将星（家長の星）

日干「丙火」から（戌）をみると天庫星（入墓の星）

どうして…（寅<sup>生</sup>午<sup>旺</sup>戌<sup>死</sup>）が『始<sup>生</sup> 中心<sup>旺</sup> 終<sup>死</sup>』なのかです。

『天貴星』は生れて始めて<sup>ものごころ</sup>物心がつく時代です。

生まれて赤ん坊のうちには、意識<sup>そな</sup>が備わっていません。  
まだ物心がついていないのです。

児童の時代になって、人間としての意識が始まります。

<sup>とら</sup>寅 『天貴星』 児童 ⇒ 人間の意識の始まる

人間の意識の始まり ⇒ 『生<sup>せい</sup>』は『天貴星<sup>てんきせい</sup>』です。

てんしょうせい かちょう  
【天将星】 家長の星です。

人生の頂点の星ですから、人間の意識の中心・頂点となる時代です。

うま  
午【天将星】 家長 ⇒ 人間の意識の中心〔頂点〕

その意識も中心を過ぎると、少しずつ衰<sup>おとろ</sup>えていきます。  
この世で【天極星（死人の星）】になっても、意識はまだ残<sup>ざんぞん</sup>存し、肉体は朽<sup>く</sup>ちても魂<sup>たましい</sup>が此の世と彼の世のあいだを彷徨<sup>さまよ</sup>う天極星の時代があります。

てんきょくせい てんくらせい にゆうぼ  
【天極星】 のつぎの時代 ⇒ 【天庫星】 入墓の時代  
で成仏<sup>じょうぶつ</sup>します。

ここまで人間の意識は続くと算命学は考えています。

【天庫星】 は人間の意識の終わりの時代です。

いぬ てんくらせい にゆうぼ しゅうえん  
戌【天庫星】 入墓 ⇒ 人間の意識の終焉

【天庫星】 で成仏して……意識の終焉をむかえるまで意識は続くとということです。

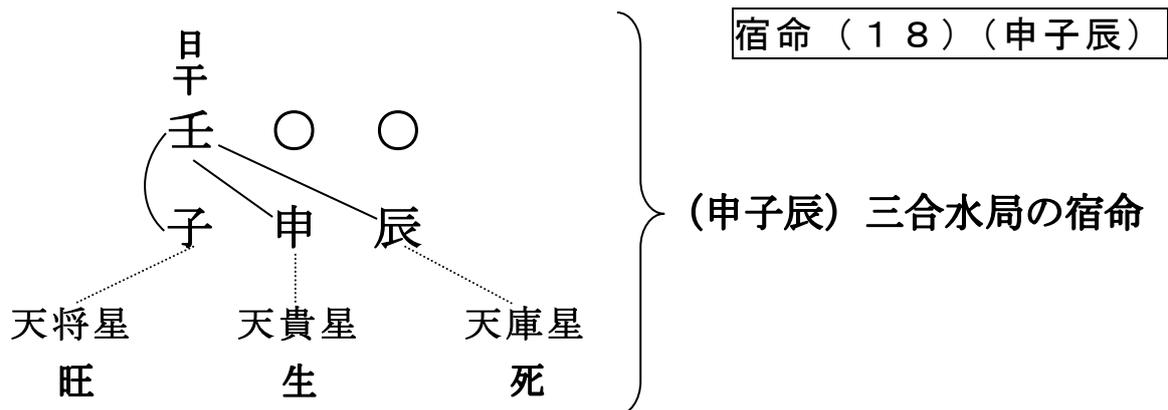
☞ 三合会局は4つありますが、どの組み合わせでも、三合会局を代表する中心が「旺」になります。

- 生 旺 死**
- ① 木性の三合会局 十二支（亥 卯 未）の結びつき
  - ② 火性の三合会局 十二支（寅 午 戌）の結びつき
  - ③ 金性の三合会局 十二支（巳 酉 丑）の結びつき
  - ④ 水性の三合会局 十二支（申 子 辰）の結びつき

〔たとえば〕（申子辰）の三合会局は（子水）が『旺=中心』になります。（子）の五行は水性です。

（申子辰）は水性の三合会局です。五行 ⇒ （木火土金水）

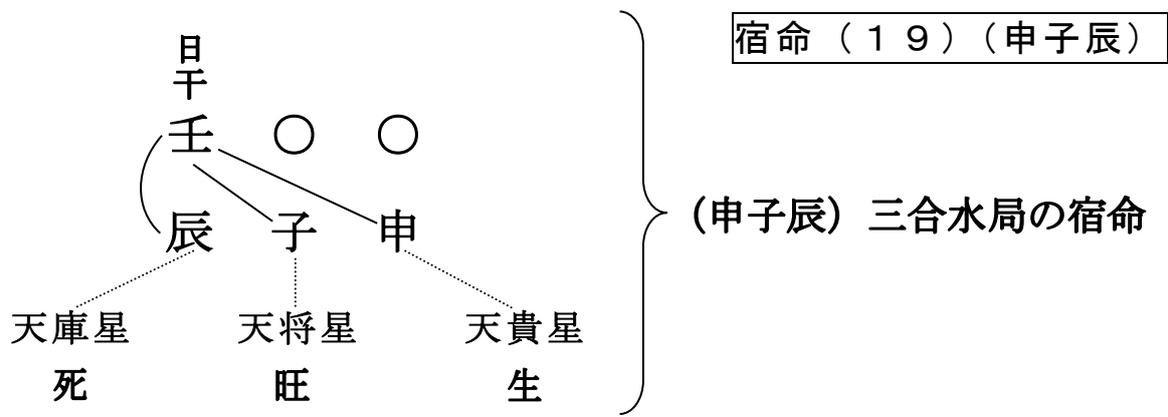
〔たとえば〕日干が「壬水」で、地支に（申子辰）があれば 宿命（18）（申子辰） のようになります。



日干「壬水」から（申）をみると【天貴星】です。

日干「壬水」から（子）をみると【天将星】です。

日干「壬水」から（辰）をみると【天庫星】です。



「壬水」から（申）をみると【天貴星】です。

「壬水」から（子）をみると【天将星】です。

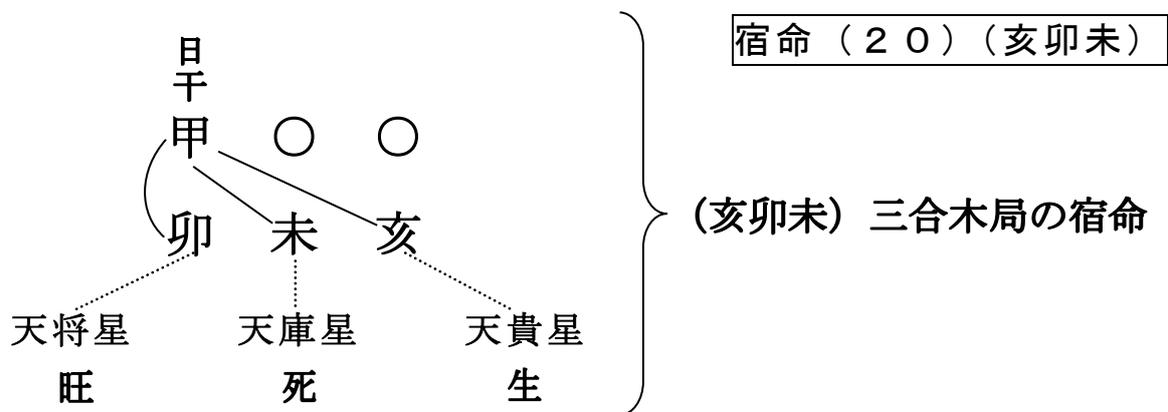
「壬水」から（辰）をみると【天庫星】です。

『十二大従星』はこのようになります。

『十二大従星表』で確認してください ⇒ 39 ページ

あるいは、日干につかん「甲木こうぼく」の人物が、地支に（亥い 卯う 未ひつじ）  
もっていれば、木性もくせいの三合会局になります。

十二大従星は【天将星】 【天庫星】 【天貴星】 です。



つまり『十二大従星』も“人間の意識”に照らし合わせてみると、「始め・中心・終わり」という組み合わせで成り立っているわけです。

これについては……いま現在はまだ覚えなくても大丈夫です。

☞ もう少し勉強が先に進みますと、陰占の宿命を基もとにして、運勢うんせいの観方みかたを勉強するようになります。

そのときに「三合会局」は改あらためて出てきます。

【初年】の課程の勉強としては……どなたかの宿命の地支に三合会局が出てきたら、(亥卯未)なのか、(寅午戌)なのか、(巳酉丑)なのか、(申子辰)なのか、4つある「三合会局」のいずれかが地支ある人物がいたのであれば……この人物はチョット“普通とは違うな”と、そのように想<sup>おも</sup>って頂ければよろしいです。

『生 旺 死』のすべてが、宿命の地支にそろっているということは、普通の人より、スケールの大きい運勢の人物になるのでは……というふうに考えておいてください。

それが(よい)とか(わるい)とかは一切ありません。

三合会局の宿命は……なかなかいません。

🔍 参照 23 ページ

✳ 小泉純一郎・前総理大臣

✳ スティーヴン・ホーキング博士〔英国の宇宙学者〕

お二人は生年月日がおなじです

だいさんごうかいきょく  
大三合会局の宿命です。

👉 だいさんごうかいきょく 大三合会局はてんかん天干の「さんかん三干」がおなじです。

## ⇒ 地球と地時空間

三合会局は「三合木局」<sup>さんごうもつきよく</sup>「三合火局」<sup>さんごうかきよく</sup>「三合金局」<sup>さんごうきんきよく</sup>「三合水局」<sup>さんごうすいきよく</sup>  
「木性」「火性」「金性」「水性」これら 4 つの三合会局があります。三合会局は 4 種類だけです。

土性の三合会局はないです。

土性には「三合会局」という考え方を<sup>あ</sup>当て<sup>は</sup>嵌めることはできないとしています。

土性だけは、五行（木火土金水）<sup>もっかどごんすい</sup>の中心であり、土性は春・夏・秋・冬どの季節にも存在します。

土性は地面であり、地球そのものですから、どの季節にも 1 年中存在して、季節の調整役（五行のまとめ役）<sup>にな</sup>を担っています。という話をしたことがあります。

48 回目 【十二支と季節の図】 04 ページの十二支盤を見るとわかりますが、十二支盤の X 線で区切られている境界には、土性の十二支が存在します。4 つの土性は〔季節の調整役〕<sup>にな</sup>を担っています。

⇒ 土性は五行の調整役を<sup>つかさど</sup>司ります。

十二支盤の春夏秋冬の各季節の終わりある十二支は（丑土）<sup>うしど</sup>

（辰土）<sup>たつど</sup>（未土）<sup>ひつじど</sup>（戌土）<sup>いぬど</sup>の四土性です。<sup>よんどせい</sup>

土性は各季節の境目に存在します。

四 土 性	{	冬と春の境目は (丑 <sup>うしど</sup> 土)	春の夏の境目は (辰 <sup>たつど</sup> 土)
		夏と秋の境目は (未 <sup>ひつじど</sup> 土)	秋と冬の境目は (戌 <sup>いぬど</sup> 土)

🔍 二十八元表をみてください。

(丑) の本元は [己<sup>きど</sup>土]      (辰) の本元は [戊<sup>ぼど</sup>土]

(未) の本元は [己<sup>きど</sup>土]      (戌) の本元は [戊<sup>ぼど</sup>土]

ほんげん  
本元には土性の [蔵<sup>ぞうかん</sup>干] が存在します。

📎 ここまでは『二十八元』がつくられた基本です。

【初年】における二十八元の勉強はここまでです。

ここまでといたしますのは……二十八元については、皆様がまだ学んでいない法則をつかわないとご説明できないのです。

ここまでの説明は、二十八元の基本で重要なことです。

ほかの法則を学びますと「この法則も二十八元に取り入れられている……」と、ご理解されるようになるでしょう。

二十八元表は、多くの技法と考え方に基づいて、作成された筋道を認識されることとおもいます。

⇒ **二十八元** 「方三位」「三合会局」は連関します。

① 季節『始め 中心 終わり』の関係。

〔たとえば〕冬は寒いから、冬の十二支（亥子丑）には、  
水性が入っています。（子）は五行水性です。

② 三合会局『生 旺 死』の関係。

三合会局は4つあります。〔たとえば〕水性の三合会局  
の（申子辰）のなかには水性が入っています。  
火性の三合会局の十二支（寅午戌）には、火性が含ま  
れています。

③ 地球の関係。地球そのものが土性です。

十二支盤の季節が変わる四土用のところには、土性の  
『気』が存在しています。

四土用（丑・辰・未・戌）は、特に土性のチカラが強い  
ところです。

**上記3つが主な考え方です**

参考：連関〔互いにつながりがあること〕

参考：関係〔何らかの役割を負って無視することができないつながり〕

☞ **二十八元表** を子と丑を〔例えにして〕説明します。

**宿命（21）二十八元表の子と丑**

	初元	中元	本元
子			癸

二十八元表 **子** の本元は癸水

	初元	中元	本元
丑	癸	辛	己

二十八元表 **丑** の初元は癸水

子と丑 2つの十二支を比べます。

二十八元表を見てください。

子の二十八元は、本元に〔癸水〕1つだけです。

丑の二十八元は、初元〔癸水〕<sup>しよげん</sup> 中元〔辛金〕<sup>ちゆうげん</sup> 本元〔己土〕<sup>ほんげん</sup> と3つあります。

子は〔蔵干〕1つです。 卯は〔蔵干〕1つです。

酉は〔蔵干〕1つです。

午は〔蔵干〕2つです。 亥は〔蔵干〕2つです。

ほかの十二支は〔蔵干〕3つです。

二十八元の合計は〔28蔵干〕あります。

☞ 「方三位」の冬の十二支（亥子丑）は北方です。

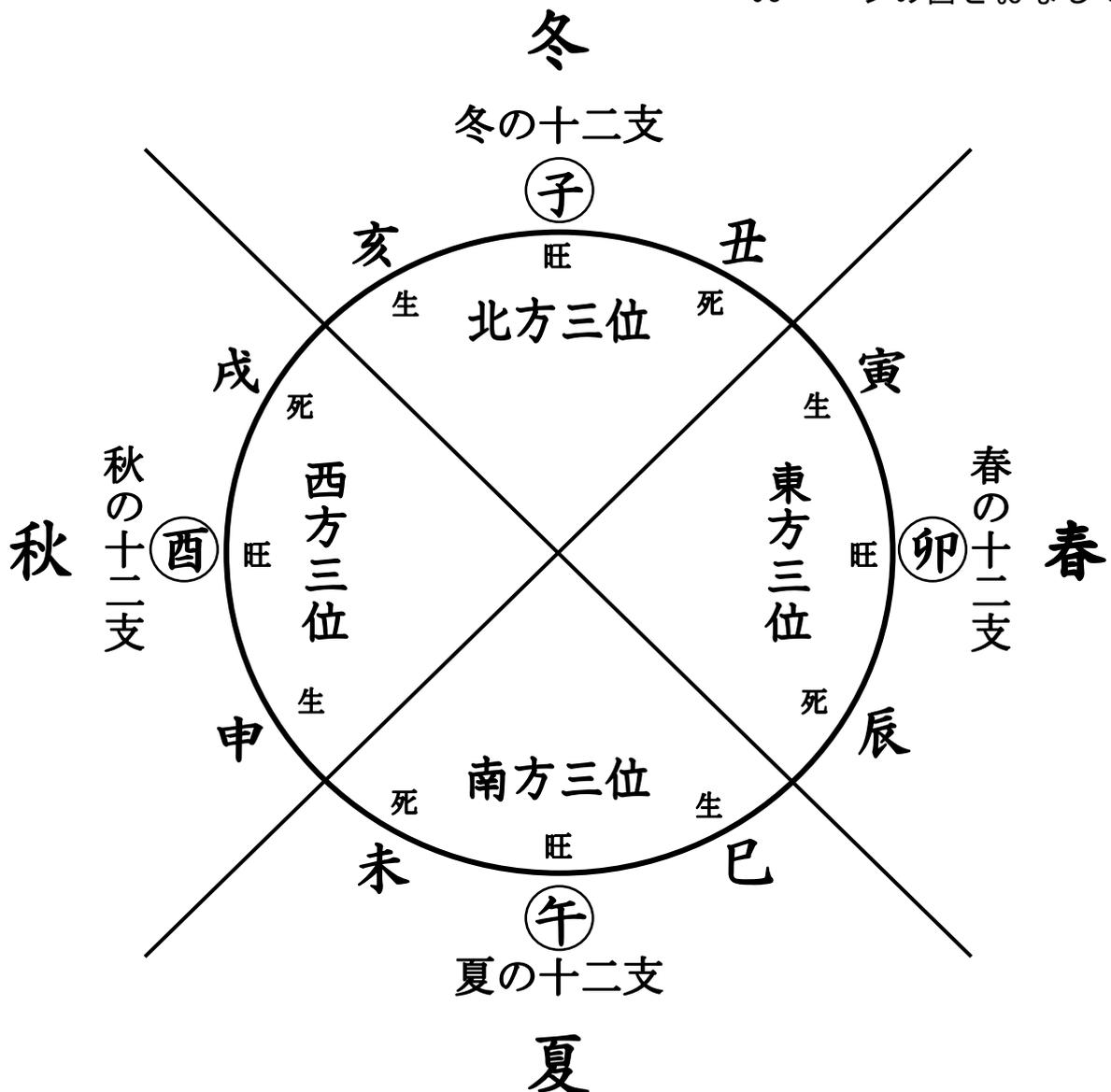
	(亥)(子)(丑)	
初元	甲	癸
中元		辛
本元	壬	癸 己

二十八元をみると、(亥)(子)(丑)

それぞれに水性が存在します。

宿命(22)方三位の図

08 ページの図とおなじです。



ほっぼうさんい い 北方三位（亥）の季節は冬です。

二十八元（亥）の初元に〔壬水〕という水性が存在します。

水というのは ⇒ 五行（木火土金水）の水性を意味します。

冬は寒い季節なので、水性の空間が存在します。

北方三位（子）の季節は冬です。

二十八元（子）の本元に〔癸水〕という水性が存在します。

北方三位（丑）の季節は冬です。

二十八元（丑）の初元に〔癸水〕が存在します。

☞（東方）（南方）（西方）の三位もおなじように考えます。

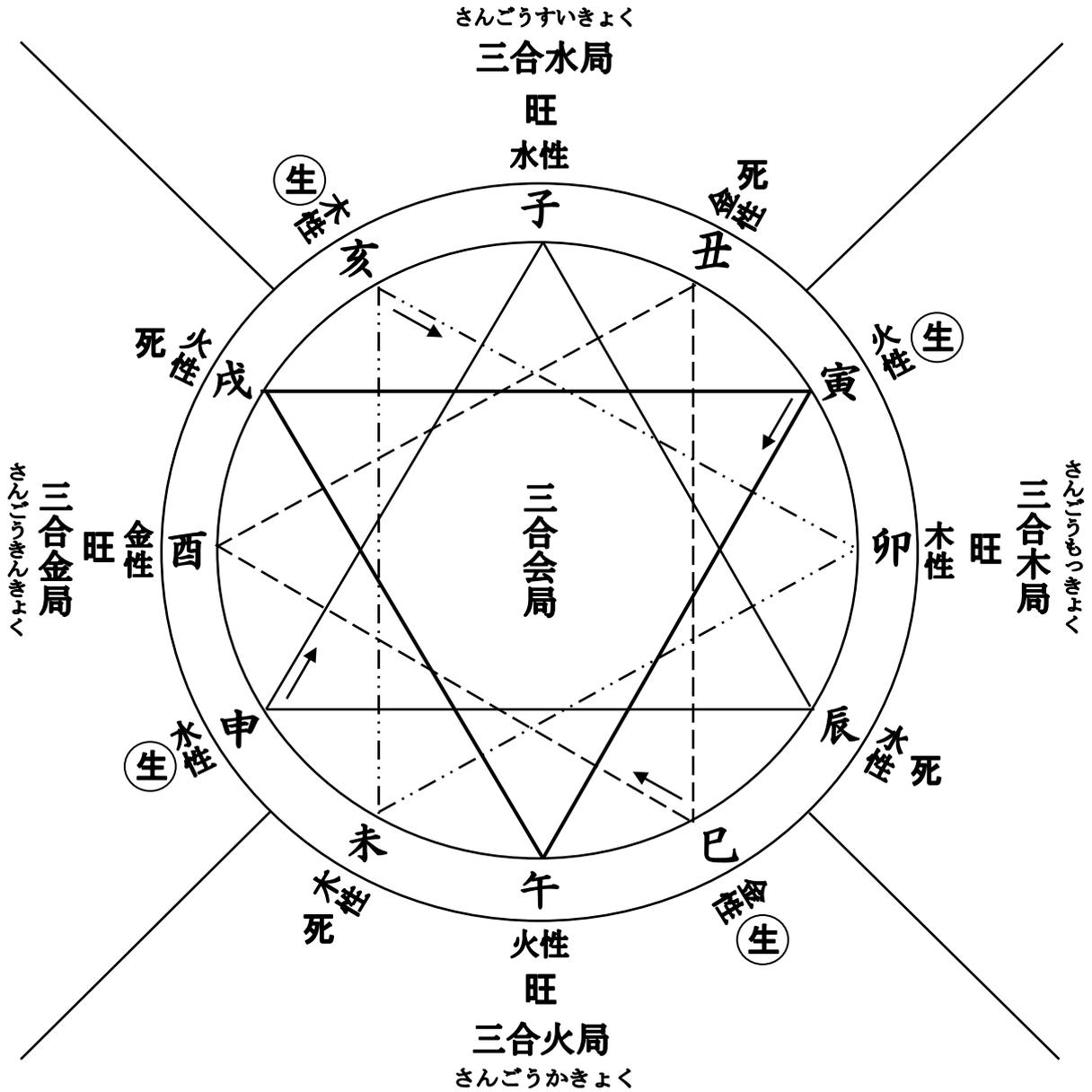
ほうさんい うし ほっぼうさんい い ね うし ぞく  
方三位の（丑）は 北方三位（亥子丑）に属します。

しかし……

さんごうかいきよく うし きんせい み とりうし ぞく  
三合会局の（丑）は 金性の（巳酉丑）に属します。⇒54 頁

☞「方三位」と「三合会局」の観方は異なりますが連関して  
います。 参考：属する〔ある（勢力）範囲や、その集団のなかに入る〕

宿命（23）三合会局の図 21 ページの図とおなじです。



さんごうもつきよく  
木性の三合会局を「三合木局」という。

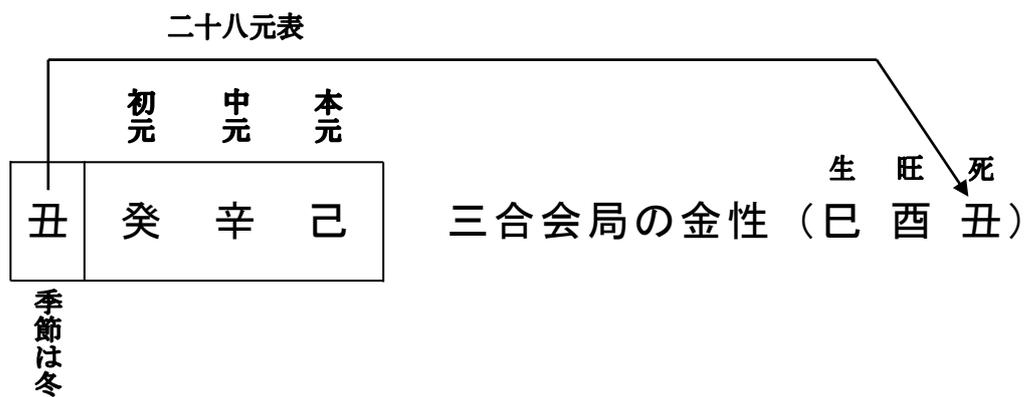
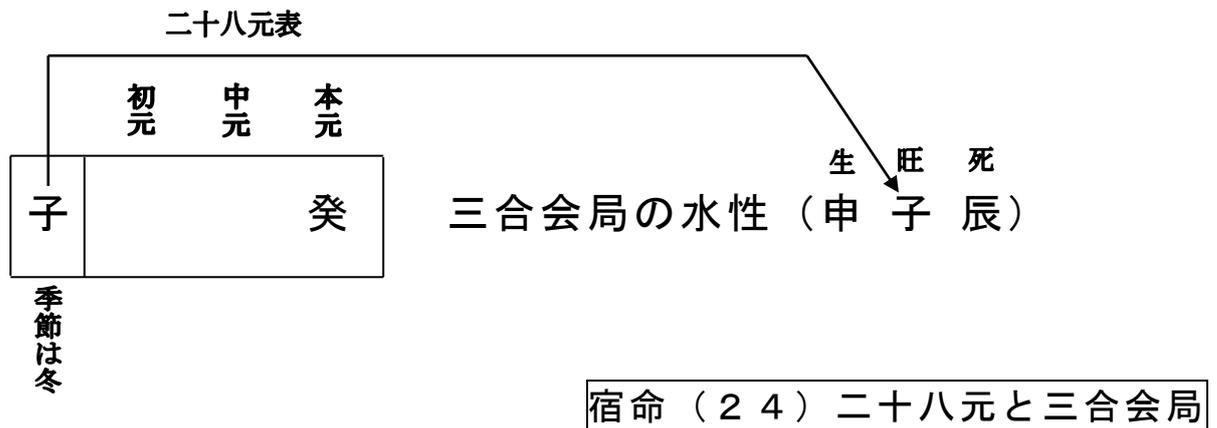
生旺死

- ① 木性の三合会局（亥卯未）
- ② 火性の三合会局（寅午戌）
- ③ 金性の三合会局（巳酉丑）
- ④ 水性の三合会局（申子辰）

三合会局は 4 つ あります。

⇒ 「三合会局」の（子）を〔例えにして〕考えます。

二十八元表（子）のなかに……水性〔癸〕が存在する理由は三合会局にもあります。そして方三位にもあります。



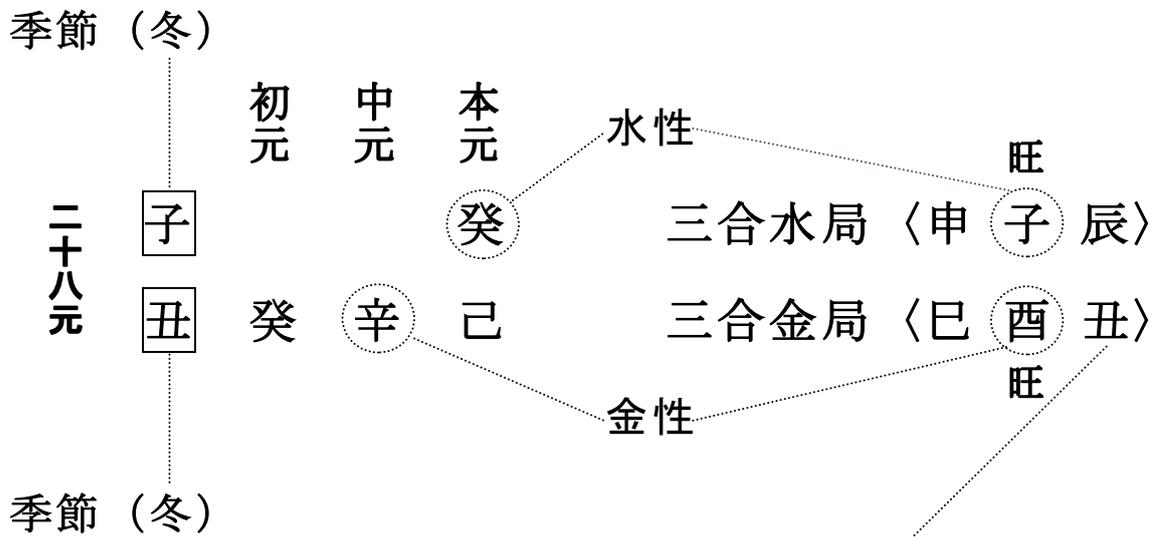
「三合水局」<sup>さんごうすいきょく</sup>（申子辰）で考えても（子）という水性が存在します。水性の三合会局（申子辰）の一員です。

（丑）の季節は冬ですが、「三合会局」の（丑）は、三合金局<sup>さんごうきんきょく</sup>（巳酉丑）の一員です。

参考：存在〔性質や働きや価値をもってそこにあること〕

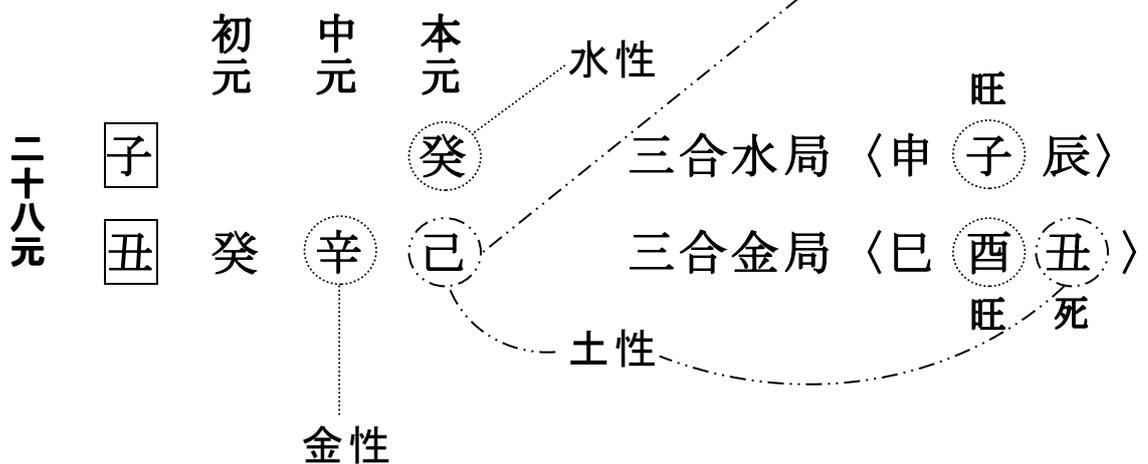
〔客観的な事実してそこにある（とされる）こと〕

宿命 (25) 三合会局 ㊶と㊷



㊶ (丑) の季節は冬ですけど、(丑) は三合金局さんごうきんきょくの一員です。それゆえ「辛金しんきん」という金性が存在します。

㊷ (丑) は土用の十二支でもありますから〔己土きど〕という土性が存在するわけです。



(子) のように、季節で考えても水が入ります。

(子) は三合会局で考えても水が入ります。

しかし、(子) は土用の十二支ではないわけですから、水性の〔癸水〕しか存在しないのです。

〔癸水〕は混ざり気のない純粹な水です。

(子) のように、二十八元の蔵干に〔癸水〕1 つしか入っていない十二支もあるわけです。

このように……二十八元に、蔵干を1 個しかもっていない十二支もあれば、3 個もっている十二支もあるのです。

そして、冬の季節なので、水性が含まれる。といっても、水性は〔壬水〕と〔癸水〕の2 つありますよね。

十二支(子) に存在するのは……どうして〔癸水〕なのかということなのです。

金性にしても〔庚金〕と〔辛金〕の2 つあります。

どうして、〔辛金〕のほうなのかという ことわり 理は、まだ皆さんが学んでいない法則のいくつかを使って、どちらの十干になるのかが決められているのです。

それはいずれ習います。

☞ そして、二十八元については……加えて1つだけ、つぎのようにおもって頂きたいのです。

〔たとえば〕 マリリン・モンロー

宿命は年干支から、順番に声に出して読んでください。

- ①「へいかのとらぼく」 ②「きすいのみび」 ③「しんきんのとりきん」

＊ マリリン・モンロー 1926-6-1 [1962-8-5] 36 歳没

③	②	①	
辛	癸	丙	宿命 (26) マリリン
酉	巳	寅	
	戊	戊	}
	庚	丙	
辛	丙	甲	
	牽牛星	天報星	陰占では二十八元の蔵干をつかう
貫索星	牽牛星	司祿星	
天祿星	鳳閣星	天極星	

宿命で地支の二十八元をみると、それぞれに〔蔵干〕が存在します。

マリリン・モンローの宿命で、二十八元に入っている  
〔蔵干〕すべてを書くとおつぎのようになります。

〔寅〕のなかには〔戊土〕〔丙火〕〔甲木〕が存在します。

〔巳〕のなかには〔戊土〕〔庚金〕〔丙火〕があります。

〔酉〕のなかには〔辛金〕が1つだけ存在します。

人体図をだすときは、マリリンが〔節入り日〕から……  
何日目に生まれたのかによって、(寅)の蔵干3つの  
なかから、どれか1つを選ぶことで、その蔵干のそれ  
ぞれが…十大主星の星になって人体図にでてきます。

〔たとえば〕年支(寅)のなかの本元〔甲木〕という  
ことであれば、日干「辛金」から〔甲木〕をみれば、  
第三命星に〔司禄星〕として出てくるわけです。

陰占の占いをするようになりますと、〔節入り日〕とか人体図  
にどの星が出ているとかに関係なく、陰占の占いは二十八元  
の〔蔵干〕をすべてつかって、宿命を観ていきます。

陰占に(寅)という十二支があつて、(寅)のなかに〔戊土〕  
〔丙火〕〔甲木〕があれば、3つすべて占いでつかえます。

☞ 人体図を出すときだけは、**節入り日** から何日目かで……3つのなかの1個しか星にはなりません。

しかし、陰占の占いするときには、人体図に何の星がでているとか……それは関係無いのです。

人体図の星に関係無く、(寅)の二十八元には〔<sup>初元</sup>戊土・<sup>中元</sup>丙火・<sup>本元</sup>甲木〕の全部が含まれているものとして、占いをしていくようになります。

あるいは、(酉)のなかには〔<sup>本元</sup>辛金〕が1個だけです。

(酉)のなかに〔辛金〕が1個だけ存在する。ということ占いをしてゆくようになります。

宿命にどの十二支があるのか、<sup>ひと</sup>他人それぞれ異なりますが、占うときは二十八元にあるすべての〔蔵干〕をつかうと<sup>おも</sup>想っておいてください。

【初年】48回目【地時空間】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】49回目【人体図の観方】です。